



あいあい岬の思い出

牧子 嘉丸



「家族で旅行に出かけたのはいつが最後だったかな」

「あれはあなたが退職した年の春だからもう三年は経つわね」

それはまだ世間の風潮が日常生活にまでうるさく口を出し始める前だった。遠い異国のことと思っていたその病疫がやがて猛威を振るいだし、旅行どころの騒ぎではなくなった。

必要かつ緊急以外の外出・移動まかりならぬという非常事態宣言が出され、仕事にも商売にも厳しくなる一方だった。そんなとき新聞の川柳欄に出た「世の中は不要不急で回ってた」という句はなかなか世相をうがっていた。同時に、いままでの安逸な暮らし方にあらためて気づかせられもした。

疫禍の流行以前と以後では隔世の感があった。家族四人で下田から西伊豆にかけての旅行もさほど昔のことでもないのに、ずいぶんつかしく思い出された。

なかでも一番の思い出は奥石廊崎の岬だった。南伊豆の弓ヶ浜から石廊崎の突端まで行き、そのまま松崎へ向かう途中でふと立ち寄ったのだった。

そこは石廊崎灯台の切り立った岩場とはちがい、なだらかな丘陵で頂きからは伊豆の島々が一望できた。山頂に向かう坂道を男坂、女坂という呼び方にならえば、急峻な石廊崎は男岬であり、ここは女岬であった。

その丘の中央にハート型の大きなリンクの碑があり、鈴がついていた。リンクに寄りかかって鈴を鳴らしたり、円の中から顔をのぞかせたりしながら、カップルが写真を撮っていた。

そのとき、足元に白い紙に包まれた花束が転がっていたことを思い出す。なぜこんなところに真新しい花束が無造作に捨てられているのか不思議だった。私は拾い上げると、リンクの台座に置いた。春の海は穏やかで、きらきらと波間がかがやいていた。その情景がありありと甦ってくる、そのときの心情もまた。

私と妻はやさしい風に吹かれながら、海岸の方へ歩いていく兄妹を見送った。

いったい、今までどれぐらい家族で旅行をしてきたことだろう。福島の五色沼・信州の青木湖・群馬の霧降高原・岩手の八幡平、そしてハワイ沖の海岸。思えばささやかな旅であったが、それぞれになつかしい情景が思い浮かぶ。だが、こうして四人で旅するのもこれで終わりだな。そんなことを妻につぶやいていた。

すでに成人している息子も娘もなんとか自立しようと苦闘していた。兄の智行は学生るときから引きこもりがちで、就職もできぬまま家で過ごしていた。その無為をとがめて、自立支援のグループに入れたが、成果は得られなかった。すでに三十歳をむかえようとしていた。妹の美月は建設会社に入ったが、先輩社員が上司からうける怒声や暴言に耐えられず、半年で辞めていた。

わが子がこの社会で人並みの幸せをなかなかつかめぬことに私は苛立ち、ときにその不甲斐なさを詰り、失望をくりかえしてきた。成人した子どもが社会的自立ができぬ苦しみは本人はもちろん、親にとってもこれほどのものとは思ひもしなかった。何が間違っていたのか、何がよくなかったのか。

互いの生育や性格まで非難して、夫婦のはげしい諍いにもなった。同時に、今の世の中が若者にとっていかに苛酷な時代なのかをわが子を通じて思い知らされた。

この旅行から帰って、二人は家を出た。

「ねえ、あの奥石廊崎のことあいあい岬っていうのを知ってた」

「知らない。どんな字だろ。相合傘のあいあいか。それとも和気あいあい」

「なんかセンス古いわね。愛が逢うって書いて、愛逢というの。おかげで美月も彼氏ができたし」

ひさしぶりで友人と飲んで悪酔いしたときに隣席の男性に介抱してもらったのがなれそめだという。この正月に訪ねてきて、いきなり「お父さん」と言われたときはどきまぎした。がっしりした体型の好青年だった。

「やっぱりあのリンクの鐘を鳴らしたのがよかったのかしら」「まさか」

そういえば智行にも出会いがあった。渋谷を歩いていたら「フットサルをやりませんか」と誘われ、そのまま代々木公園で青年男女とゲームを楽しんだ。無職だというと、一人が日雇いバイトを募集する会社を教えてくださいました。それで催し物の舞台やコンサートの式場づくりなどの仕事が入るようになった。そうだ、それでいいんだ。とにかくひとりでくすぶってちゃだめなんだ。私はうれしかった。

「よし。一句浮かんだぞ。『あいあいの鐘のおかげか恋実る』どう?」

「選外ね。わたしなら、『あいあいの風に吹かれしブーケかな』
見てたんだ。」

そう思うと、またあのハート型のリンクとそのむこうに広がる穏やかな海の情景が甦ってくるのだっ
た。

あいあい岬の思い出

2023年10月28日 発行

著者 牧子 嘉丸

町制施行60周年・かなみ知恵の和館10周年記念事業冊子

発行 函南町教育委員会

製本 函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）

電話番号 055-979-8700

419-0122 静岡県田方郡函南町上沢107番地の1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。

（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。

作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとし、主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること。ただし、当館は著作者の創造性を重視し、作品内容には関与しないものとし、

家族四人で最後に旅行
に行ったのはコロナ禍以
前、もう三年も前のこと
だ。下田から西伊豆にか
けての旅行の途中に立ち
寄った奥石廊崎での思い
出。

